以下は羽村古文書研究会の会報「古文書はむら」（第16号）からの転載です。

（2020年5月14日）

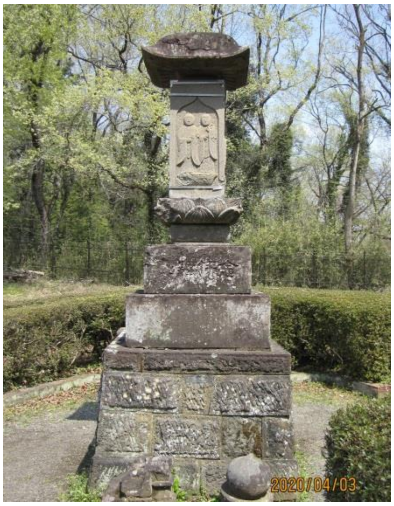
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

34　天変地異と古文書

新型コロナの影響で外出の自粛要請があっても、そうそう家にばかり居られない。好天を選んで出掛けた。瑞穂の六道山から狭山湖一周の凡そ18㎞。トレッキングシューズを履きリュックにむすびを入れ軽快に歩いた（歩こうとした）。「三密」とは無縁なので散歩の一環として許されるだろうと勝手に考えた。実際ほとんど人と会わない。狭山湖の深いエメラルド色した湖面とその先に見える奥多摩の大岳の景色は圧倒的な美しさだった。

途中、武蔵村山の領域になるが、「六地蔵」に巡り会った。この六地蔵は唐破風型の墓石（あるいは燈籠）に似た形で三面に二体づつの地蔵尊が刻まれている。背面に碑文があるというが高くて読めない。案内文には「明治三十年八月から十一月にかけて赤痢が大流行し、中藤・横田・三ツ木・岸の四ヶ村合わせて五十一人が死亡したので、念仏講中の人々が供養のために浄財を募金し造立したことが背面に刻されている」とある。少し調べると、「明治三十　年六月、関東を中心として全国的に赤痢が大流行した。総患者数は九万人とも言われ、死亡率は25％、より良い医療環境にあった東京だけ見ても死者は二千人を超えた」という記事をネットで見つけた。

「人類は疫病との闘いの歴史」と言われるが学校できちんと教えていないのは不思議だ。身近で具体的な遺物をみると、新型コロナで生活が脅かされる中では現実的なものとして受け入れることができる。いつか背面の文章を読んでみたいとも思った。



さて話は変わって……。古文書に天変地異などの模様が書かれている例は多いと思われる。私もある和算家の史料を読んでいたら、安政二年の地震の記述に出会ったことがある。ここでは天変地異と古文書（あるいは史書）について少しく述べたい。

我が国の書物に「地震」の文字が最初に出現するのは日本書紀の巻十三で、西暦四一六年八月に「地震」とのみ記されているという。

今心配されている南海トラフ地震に相当する最初の地震は「白鳳地震」（六八四年十一月）で、日本書紀に次のようにあるという。

「大地震。挙国男女叺唱、不知東西。則山崩河涌。諸国郡官舎及百姓倉屋。寺塔。神社。破壊之類、不可勝数。（以下省略）」（大地震で人々は叫び逃げ惑い、山が崩れ、川が氾濫し、壊れた建物は数え切れない）。

南海トラフ地震に相当する次の地震は、八八七年（仁和三）七月の「仁和地震」で、『日本三代実録』①に次のようにある。

「卅日辛丑、申時、地大震動、経歴数剋震猶不止、天皇出仁寿殿、御紫宸殿南庭、命大蔵省、立七丈幄二、為御在所、諸司倉屋及東西京廬舎、往往顛覆、圧殺者衆、或有失神頓死者、亥時又震三度、五畿内七道諸国、同日大震、官舎多損、海潮漲陸、溺死者不可勝計、其中摂津国尤甚、夜中東西有声、如雷者二」

（卅日辛丑、申の時、地大いに震動す、数剋を経歴すれども震(ない)なお止まず、天皇仁寿殿を出で紫宸殿の南庭に御す、大蔵省に命じて七丈の幄(あく)二つを立て、御在所と為す、諸司倉屋及び東西京の廬舎、往往にして転覆す、圧殺の者衆(おお)く、或は失神頓死の者有り、亥の時又震(ない)三度なり、五畿内七道諸国、同日大いに震(な)ふ、官舎多く損し、海潮陸に漲(みなぎ)り、溺死者勝(あ)げて計(かぞ)うべからず、其の中、摂津国尤(もっと)

も甚し、夜中に東西に声有、雷の如きは二なり）

少し遡るが、『日本三代実録』には、東日本大震災のとき話題になった八六九年（貞観十一）五月の「貞観地震」の記述もある①。

「廿六日癸未。陸奥國地大震動。流光如レ晝隠映。頃之。人民叫呼。伏不レ能起。或屋仆壓死。或地裂埋壔。馬牛駭奔。或相昇踏。城槨倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不レ知二其數一。海口哮吼。聲似二雷霆一。驚濤涌潮。訴泡議長。忽至二城下一。去レ海數十百里。浩々不レ辨二其涯涘一。原野道路。惣爲二滄溟一。乗レ船不レ遑。登レ山難レ及。溺死者千許。資産苗稼。殆無二子遺一焉。」（二六日癸未の日、陸奥国で大地震が起きた。流れる光が昼のように照らし、人々は叫び声を挙げて身を伏せ、立つことができなかった。ある者は家屋の下敷きとなって圧死し、ある者は地割れに呑まれた。驚いた牛や馬は奔走したり互いに踏みつけ合い、城や倉庫・門櫓・牆壁などが多数崩れ落ちた。雷鳴のような海鳴りが聞こえて潮が湧き上がり、川が逆流し、海嘯が長く連なって押し寄せ、たちまち城下に達した。内陸部まで果ても知れないほど水浸しとなり、野原も道も大海原となった。船で逃げたり山に避難したりすることができずに千人ほどが溺れ死に、後には田畑も人々の財産も、ほとんど何も残らなかった）

調べると史書に書かれた地震は他にも沢山ある。近世の古文書では、一七〇七年（宝永四年）十～十一月の「宝永地震」、一八五五年（安政二年）十月の「安政地震」などの記述が結構あるようだ。近在では宝永地震の際、青梅二俣尾の名主谷合七兵衛の見聞に、

「十月四日未ノ上刻大地震同夜ノ内小地震四度　五日朝六ツ時大地震後ニ聞大坂四国紀州大地震ツナミニテ人夥シク流失駿河遠州伊豆方面ツナミ　砂降　十一月廿二日夜地震三度廿三日終日辰巳ノ方ヨリ震動（以下省略）」②とある。

ところでこのような過去の地震は、古文書なども引用して現在は学術的に研究されている。歴史地震学とでもいう分野だ。古文書も地震予測に一役買う時代になってきたが、先の東日本大震災や原発事故には間に合わなかったのは何とも残念だ。因みに古文書から考えられる南海トラフ地震は、平均発生間隔は180年で、これから計算すると二〇一三年から30年間の発生確率は6％という。但し、一六〇五年（慶長十年）の「慶長地震」は南海トラフ地震ではないとした場合だという。一方、政府は発生確率を30年位内に70～80％とし、平均発生間隔は88年としている③。

もちろん、両者を比較して云々する立場ではないが、天変地異に限定して深く調べるのも古文書の一つの学び方かも知れないと思ったりしている。

参考文献
①『日本三代実録』（国会図書館デジタルコレクション）
②馬場憲一「宝永の大地震と富士山大噴火時の多摩」（『多摩のあゆみ』156号）他
③「未来を探る　史書手掛り、次はいつ　南海トラフ地震」（東京新聞　2020年2月29日）

挿絵の紹介

一、『安政箇労痢流行記』（安政五年刊、国立公文書館）の「茶毘室混雑の図」（次頁）

安政五年、江戸の人々はコレラの猛威にさらされた。この年、長崎に始まったコレラの流行は、上方、東海道筋を経て七月に江戸に至り、八月に大流行。町ごとに百余人の死者が出、火葬しきれず、棺が山積みになった。コレラは妖怪変化の仕業であるとして「狐狼狸」と呼ばれ、様々な流言が生まれた。虎狼狸の三つの動物が合体した姿をしていて、読みはコレラがなまったとか。

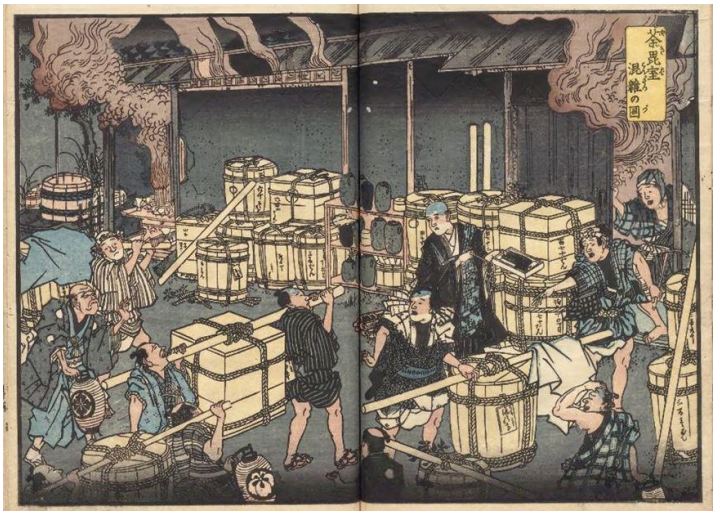
ネットには次のような記事があった。

『藤岡屋日記』に、文久二年に江戸での三度目のコレラの大流行があった際、武州多摩郡

『藤岡屋日記』のコレラ獣
（「ウィキペディア」より）

三ツ木である人物がコレラから快方に向かった後、イタチのような獣が目撃され、薪で叩き殺して火で炙って食べたとある。同村でコレラに感染した別の人物の家でも、やはり同様の獣が家から出て行く様子が目撃されたといい、多摩の中藤村や谷保村では、コレラによる病死者の遺体から同様の獣が飛び出したという。

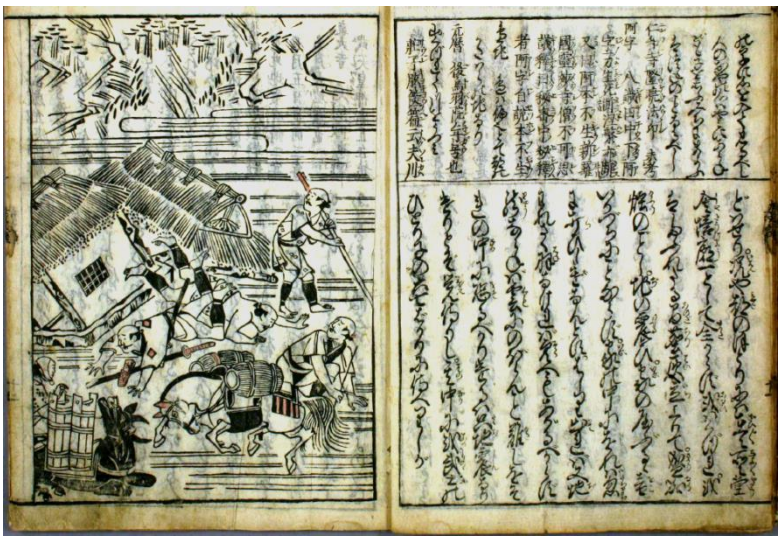
三ツ木も中藤村も近くの場所だ。



二、『方丈記之抄』（明暦四年、早大古典籍）にある元暦二年七月の大地震にまつわる図。

方丈記（鎌倉時代）は鴨長明の有名な随筆。その中に元暦二年（一一八五）七月の大地震にまつわる記述が次のようにある。

「また同じころかとよ、おびただしく大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず、山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巌割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ち処をまどはす。都のほとりには、在々所々堂舎塔廟、一つとして全からず、或いはくづれ、或いは倒れぬ。塵灰立ちのぼりて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家の破るる音、雷に異ならず。家の内に居れば忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、空をも飛ぶべからず。龍ならばや雲にも乗らん。恐れのなかに恐るべかりけるはただ地震なりけりとこそ覚えはべりしか」

この地震は、ウィキペディアで調べると、マグニチュードは7.4ぐらいとある。相当大きい地震だったようだ。

下図は、明暦四年の『方丈記之抄』から抜粋したものです。